

それどころか、体の中でほかよりも弱く見える部分が、かえって必要なのです。私たちは、体の中でつまらないと思える部分にかえって尊さを見いだします。実は、格好の悪い部分が、かえって格好のよい姿をしているのです。しかし、格好の良い部分はそうする必要はありません。神は劣っている部分をかえって尊いものとし、体を一つにまとめ上げてくださいました。それは、体の中に分裂が起こらず、各部分が互いに配慮し合うためです。一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分が共に喜ぶのです。（Iコリント12：22～26）

パウロは、聖霊によってイエスは主であると告白した者は、一つの霊から多様な賜物が与えられ、それらを神に献げることで、全体・教会に益をもたらす働きとなると語った。そして、「キリストの体なる教会論」が展開される。

体が多くの部分から成り立ち、一つの体を形成しているように、キリストの場合も同様である。私たちは皆、ユダヤ人もギリシア人も、奴隷も自由人も、一つの霊による洗礼を受け、一つの霊を飲ませてもらい、一つの体になった。体は一つの部分ではなく、多くの部分から成っている。「足が、『私は手ではないから、体の一部ではない』と言ったところで、体の一部でなくなるでしょうか。耳が、『私は目でないから、体の一部ではない』と言ったところで、体の一部でなくなるでしょうか。もし体全体が目だったら、どこで聞きますか。もし全体が耳だったら、どこで嗅ぎますか。」神は、体に一つ一つの部分を置かれ、一つの体にしたのである。だから、目が手に向かって「お前は要らない」とは言えず、頭が足に向かって「お前たちは要らない」とは言えない。体は各部分が有機的に結合し、体全体の働きを可能にしている。この時、パウロは下記のように述べている。体の中でほかよりも弱く見える部分が、かえって必要なので、体の中でつまらないと思える部分にかえって尊さを見いだす。格好の悪い部分が実は、格好のよい姿をしている。しかし、格好の良い部分はそうする必要はない。神は劣っている部分をかえって尊いものとし、体を一つにまとめ上げてくださっている。それは、体の中に分裂が起こらず、各部分が互いに配慮し合うため、一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分が共に喜ぶ。何と慰めに満ちた言葉であろうか。つまらない部分に尊さを見出し、格好悪い部分が格好良い。神は劣っている部分を尊いものとして、一つの体にしてくださっている。そこでは、分裂が起こらず、互いに協働し合い、「喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣きなさい（ローマ12：15）」という、真の共生が実現している。「あなたがたはキリストの体であり、一人一人はその部分なのです。」私たちは、このキリストの体なる教会に招かれ、共に生きる者とされている。何と喜ばしいことか。

神は教会を生かすために、色々な人を立てられた。第一に使徒、第二に預言者、第三に教師、次に奇跡を行う者、癒しの賜物を持つ者、援助する者、管理する者、異言を語る者などである。当時の教会の働きが分かり、興味深い。預言者は旧約聖書の預言者ではなく、福音を語る人である。異言を語る者は、聖霊を受けて、人には理解できない言葉で、神を賛美する人である。皆が同じ働きをすることなく、与えられた多様な賜物を献げ合って、働く。パウロは、もっと大きな賜物を熱心に求め、キリストの教会の部分として、神に仕える者となりなさいと勧めている。